

# 1. 学習者の理解を助ける敬語指導をめざして --- 「ウチ・ソト」の原理を中心に

伊藤ゆり  
ミシガン州立大学

Abstract:

The uchi and soto concept in keigo learning

The present paper attempts to reexamine the teaching of keigo in order to make it more approachable for learners. The author examines the issue from three aspects of difficulties that learners may experience: 1) psychological aspect, 2) cognitive aspect, and 3) misunderstanding due to differences in the cultural backgrounds. First, the paper argues that seeking a common ground found in the keigo system and the learners' culture may mitigate the psychological barrier that learners may have toward keigo learning. Second, it proposes gradual introduction of the keigo system. Moreover, based on the examination of keigo research, it proposes the use of the uchi/soto concept as a key in keigo learning. It is cognitively less demanding to learn something new when the overarching concept is already familiar to the learner. Since the uchi/soto concept is found often in the course of the study of Japanese and therefore is familiar to the learner, utilization of that concept in keigo teaching would make it easier for the learner to understand the keigo system. Thirdly, the paper touches upon a possible danger in emphasizing power and hierarchical relationships. Though these terms may be universal (Brown & Gilman, 1960), the understanding of these terms are different from one culture to another. For this reason as well, the use of the uchi/soto concept as a key concept may help keigo learning.

## 1. はじめに

「ぼくは上司のこと全然尊敬していないから、敬語なんて使いたくないのに、どうして敬語を使わなければならないのかわからない。大家さんのおばあさんはとても親切だし、尊敬してるから、おばあさんには敬語を使いたいけど、僕が敬語を使うとおばあさんはそんなことしなくていいって言うし。」これは、政治・経済などかなり高度なことまで日本人とほぼ問題もなくコミュニケーションができるぐらいしっかりした日本語を身につけた、あるアメリカ人の上級レベルの日本語学習者の発言である。この発言は、敬語指導のある一面をするどくついているのではないだろうか。つまり、彼の発言を聞いていると、アメリカ人の意図する、あるいはこの学生の意味する「尊敬」と、日本人が考える「敬」語とには、多少のずれがあるのではないかと思うわけである。また、「先生とは毎日話すし、とても親しくなったから、もう敬語を使わなくてもいいでしょう？」という学生の疑問。この発言も、我々が日本語を教える時に考えなければいけない一面をついているだろう。そして、日本語学習者からよく聞くのが、「敬語は難しい」という言葉。このように「難関」だと思われているいわゆる敬語は、しかし（残念ながら？）避けて通ることはできない。確かに日本語の敬語体系は、色々な要因がからみあって複雑ではある。しかし、この「敬語は難しい」とか、「敬語は日本語に特殊なものである」という意識は、我々教師の敬語指導を見直す必要性を示唆しているのかもしれない。

そこで本稿では大学生の学習者を念頭におき、学習者にとってより理解しやすい敬語指導について考察する。具体的には、1) 学習者にとっての心理的負担、2) 認知的負担、3) 文化的背景の相違のために起こる概念のずれ、の三つの側面から検討する。特に2)、3)の点において、敬語使用にまつわる概念・条件を考察した上で、学習者の理解を助けるアプローチという観点から「ウチ・ソト」の原理を主とし「上下」の原理を従とした指導の意義について考察する。

## 2. 心理的負担の考慮

学習者を中心に、できるだけ学習者の理解を助ける指導という観点から、まず、心理的負担について考えてみたい。「敬語は複雑な言語体系で日本語に特有なものである。日本語を勉強するからにはそれを制覇せねばならぬ」などと言うと学習者は萎縮してしまうかもしれない。確かに敬語の文法的な面は英語などには見られないものもあるが、敬語を使う意図は、日本特有のものではなく、実は自分の文化にも共通しているのだということを知ることは、学習者の心理的負担を軽くし、敬語に対する壁を取り除くのに役立つと思われる。Brown&Levinson (1987)は、お互いに配慮を持ってコミュニケーションをするのは普遍的であるという立場に立っている。学習者の文化でも、例えば面接に行く時には穴のあいたヨレヨレのジーンズなどははずききちんとした服装をするだろうし、初めて会った人には握手をするし、またいきなりくだけた言葉で話したりはしない。また、多くの大学では学生は、教授のことをよく知っていてもファーストネームでは呼ばず、Professor Smithというふうに呼ぶだろう。実際にどんな言語行動が「丁寧」とか「乱暴」とか判断されるのは文化によって尺度が異なるが、相手に対して配慮を持って話すということは自分達の文化にも共通しているのだと意識することから出発すれば、敬語学習に対する心理的負担を減らすことになるであろう。

どの文化でもスムーズな人間関係を保つために相手に対して配慮をもって話す。この配慮にまつわる表現を「待遇表現」と呼び、学校文法で扱われる尊敬語・謙譲語・丁寧語のいわゆる「敬語」は、その待遇表現の一部であるとする見方が最近では一般的になっている。以下、狭義の意味での敬語を「敬語」と呼ぶことにする。

## 3. 認知的負担の考慮

学習者が「敬語は難しい」と言う時、一つは一度に提出される膨大な敬語体系に面くらうということがあげられる。いろいろな教科書を見ると、漢字や他の文法項目では難易度を考慮して提出されている（例えば、漢字をはじめから1945字導入したりしない）のに、敬語体系の説明が、敬語の様々な形とともに一つの章で一度に出されている場合が多いのはなぜだろうか。学習者のもっている能力より少し上をねらうというのは動機づけも高まり効果的だろうが、日本人でも敬語が適切に使えるようになるまでかなりの時間と訓練を要するのに、一章で一度に多すぎるぐらいの情報が出されると、外国語として日本語を学ぶ学習者はやる気がそがれてしまうのではないか。もちろん、日本語の各機関・各プログラムにおいて、日本語教育全体の流れの中での敬語の位置づけは異なるだろうが、日本語学習のかなり早い時期から、敬語を「小出し」にした方が良いだろう。「いらっしゃいます」「なさいます」ぐらいの非常に少数の敬語をしかも尊敬語だけ教えるようにしたらどうだろうか。謙譲語は尊敬語に比べると、実際にはあまり使わないためである。それが、定着したらもう少し足していき、謙譲語でも「まいります」など、頻繁に使われるものを出していくというようにするのが良いかと思う。

もう一つ、学習者が「敬語は難しい」と言う時、実はその文法的な形を覚えることではなく、いつ誰に使うのかという使い方の面が難しいのである。従って、敬語を全く個別の項目としてとらえるのではなく日本語のほかの項目を勉強する中で学んできた概念と関連づけて理解できるようにしたい。新しいことを学ぶ際に、すでに持っている知識やストラテジーが応用できると認知的に負担が少ない。敬語使用にまつわる概念は「敬語」だけに特有の概念ではない、つまり敬語が「全く個別に覚えなくてはいけない」項目ではなく、日本語のほかの項目とも共通する概念が背景にある、ということを知ることができると、日本語を勉強しながら学んできた概念が応用でき、学習者の理解の助けとなるだろう。

そこで次に、日本語母語話者がどんな条件のもとで敬語を使用するのかについて考えてみる。

#### 4. 敬語使用のプロセスと敬語行動の意味構造

敬語使用に関しては言うまでもなく様々な研究がなされている。例えば、杉戸（1983）は、待遇表現というのは「気配り」の言語行動であるという立場から、どんな表現を選択するかをの仕組みを説明している。例えば、会社で朝、課長が部下に「今日いらっしやる加藤さんは大切なお客さまだから、くれぐれも失礼のないように頼むよ。」と言って念を押す場合を考えてみると、課長がこの発言をする際に、話し手である課長にとって気配りの対象となるのは、「課長から見た部下（～だ・頼むよ）」と「部下から見た加藤さん（失礼のないように行動する）」であり、課長から見た話題の人物は「課長から見た加藤さん（いらっしやる・加藤さん・お客さま）」である。課長は、人物や自分のおかれた状況を含めた周囲全体を考慮に入れて、これらの対象に気を配って上記の発言をしたわけである。この例の気配りのプロセスは次のように図示されている（原文は縦書き）。

<周囲>	<みなし>	<みなされた周囲 扱いの対象>	<扱い>	(語形・ 行動の選択)	<待遇表現>
加藤氏→大切な顧客だ→	大切な客	→大切に扱おう	----->	失礼のない行動をとる	

つまり、まず自分のおかれた周囲に対して、加藤氏を大切な客だと「みなす」段階、その対象をどう扱うかを考慮する「扱い」の段階がある、というように気配りを一定の手続きのプロセスとしてとらえようとしている。

では、このようなプロセスを通して具体化される敬語行動は、どのような意味構造から成り立っているのか。南（1987）は、敬語の意味構造をとらえるための構成要素として1) 顧慮、2) 扱いの対象、3) 扱い方の特徴の三つをあげ、敬語の一般の意味構造はこの三つの組み合わせからなるとしている。これらの要素がさらに「参加者」、「コミュニケーションの内容」、「状況」の要素と組み合わせさせて敬語が使用されると言っている。「参加者」というのは、話し手、聞き手、関係者などのこと、「コミュニケーションの内容」というのは動作をしているのは誰かなどの内容や、話し手の言語表現についての態度などを含む。「状況」というのは、コミュニケーションが起こる時の状況のことである。つまり、1) 敬語を使う時には、「扱いの対象」つまり聞き手や話題の人物などについて、話し手はそれがどんな対象かを判断し、何らかの気配りをする（「顧慮」。これは上記の杉戸氏の「みなす」段階に対応すると思われる）。例えば、「～です」や「～ます」を使うのは、聞き手に対して顧慮がある場合であり、「お～になる」や「～られる」を使うのは、動作を行う人に対する顧慮である。2) このような顧慮は、「扱いの対象」に対する話し手の判断（目上か目下か、親しいか否か、改まった状況かなどについての評価的な態度）を伴っている。3) 話し手はそうした顧慮や評価の態度に基づいて、対象によって扱い方を変えるが、その扱い方の違いを反映した表現の使い分けがある（「扱い方の特徴」。杉戸氏の「扱い」の段階に対応する）。例えば、「研究」と言うか「ご研究」と言うかなど。実際に話し手が聞き手と面と向かった時には、その聞き手や第三者との関係をどのようにとらえ、どのように敬語を使用するかを、即座に判断しなければならないが、南(1987)によると、そのように具体的にどのような敬語表現を使うかには、「外的条件」（言語外の人間関係、ことがら、状況に関する条件）と「内的条件」（談話関係、文構造、単語構造などに関する言語体系内の条件）が関わるとして、それぞれの条件を細分化している。人間関係の条件としては、(a)（例えば動作主が）本人か第三者か、(b) 性別、(c) 所属階層・地位・立場、(d) 上下関係：1) 身分的上下関係、2) 生得的上下関係、3) 経歴的上下関係、4) 役割的上下関係、5) 差別的上下関係、6) 能力的上下関係、7) 立場的上下関係、8) 絶対的上下関係、(c) 親疎関係：1) 心理的親疎関係、2) 社会的親

疎関係、などをあげている。上下関係の細分化にも反映されているように、日本語の敬語では上下関係の原理が優勢だという見方である。

また、Ide (1982) は敬語体系は日本語の丁寧表現の中心を成すものであり、敬意を表すべき人と話したり、あらたまった場面で話す時などに使用される、社会的に規定された言語体系であるとしている。そして、敬語使用の条件として文法的規則、社会的規則をあげている。Ideの言う「文法的規則」「社会的規則」は、南(1987)の「内的条件」「外的条件」に、それぞれほぼ対応する分類方法であると言える。Ideは、敬語使用を左右する社会的規則には多くの社会的・心理的な要因が組みあわさっていると述べてはいるが、ここでも南(1987)と同様、焦点は「上下」の概念に当てられている。つまり、社会的地位、力関係、年齢、あらたまった場面で会話であるか否かが、敬語使用を左右するとしている。尚、敬語は敬意を表すべき人と話す時に使われる言語体系であるという説明は、学習者にとってはわかりにくい概念のように思われる。これについては後で述べる。

## 5. 文化的背景の相違のために起こる概念のずれの考慮

### ---ウチ・ソトの軸を基本とする敬語指導

これらの研究は、敬語体系を明らかにするために貴重である。日本人が敬語を使う時、相手を見て瞬時に適当な表現を選んでいるわけだが、それは実は、南氏やIde氏の言う条件項目に説明されている社会的・心理的な要素を瞬間のうちに、又、無意識のうちに組み合わせて、杉戸氏のモデルに見られるプロセスを経て具体的に表現していると言える。教師としては、それを心にとめておく必要があるだろう。ただ、研究から得られた複雑な研究理論を、日本の文化的背景を持たない学習者に、そのまま提示するのは問題があると感じる。学習者を中心に考えた時、研究成果が複雑であればあるほど、できるだけ簡明に説明する必要があると思われる。Ide (1982)、南(1987)に限らず多くの敬語研究では敬語使用にまつわる原理として、主に上・下、親・疎があげられ、その他、恩恵・被恩恵、あらたまり・くだけ、強・弱などがあげられている(北原[1988]、柴田[1988]、など)。日本語教育でも上下、親疎の概念はよく使われているが、学習者の理解を助けるアプローチという観点から、もう一度ここで敬語使用にまつわる人間関係を考えてみると、上下関係の原理を前面に押し出して敬語を指導するより、「ウチ・ソト」の軸を基本とし、それに「上下」の原理がそれぞれ関係していると考えた方が適当ではないかと考える。

それは次のような理由による。一つには、「上下」の原理は、日本語以外にもある普遍的な概念である(Brown&Gilman,1960)ため、学習者にとって印象が強くなりすぎるのではないかということである。人間の上下関係と言った場合、社会的上下関係もあれば、ある場面での力関係も関連してくるが、学習者自身の文化にもある「上下」の概念を利用してそれを中心に敬語を教えると、実際の日本社会での敬語使用とのずれがかなり出てくるのではないか。例えば、店員やタクシーの運転手に対する場合、秘書に対する場合など、自分の国の文化の尺度を使うために、丁寧になりすぎたり、逆にぞんざいに聞こえたりするようなことになりかねない。つまり、「上下」の普遍的な原理の解釈が文化によって違うため、学習者はその「ずれ」に気づくまで時間がかかるし、混乱をまねく可能性も高い。また、「親疎」の概念も、学習者が自国の習慣をもとに理解している概念と日本のそれとにずれがあることに気づかない場合、不適当な敬語使用をする可能性がある。毎日会う職場の上司や秘書、教師に対する言葉遣いなどである。

第二に、日米における敬語行動の比較研究の結果も、「ウチ・ソト」の原理を主とし「上下」の原理を従とした指導が有効ではないかと示唆しているように思われる。Hill et al. (1986)、井出、他(1986)は、大学生を対象に、日米の敬語行動の比較を行っている。この研究では、人にペンを貸してもらいたい時に使う表現が相手によってどのように違うかを日米の大学生を対象に比較したものである。その結果、頼み方の丁寧なものからそうでないものに配列すると、日米両方のグループで次のようなほぼ同じ傾向が見られた。

社会的地位が高く力のある人→目上→サービス業に携わる人→友人→家族や親しい友人

社会的地位が高く力のある人：教授、医者など

目上：中年の人、大家など

サービス業に携わる人：郵便局員、ウェイター／ウェイトレスなど

友人：アルバイト仲間、顔見知りの学生など

両グループで丁寧度の順序はほぼ同じだが、違う点は、日本グループでは、使われる表現が、相手が話し手の「ウチ」に属する人か「ソト」に属する人かで、かなりはっきり区別されているのに対して、アメリカグループでは、「ウチ・ソト」が丁寧度の尺度には日本ほどはっきりになっていないことである。たとえば、「母親」が日本グループでは兄弟や彼／彼女と同じぐらい気楽な相手とみなされているが、アメリカグループではそうではない。日本側では、アルバイト仲間や同じクラスの学生に対する丁寧度と、よく行く店ではあってもその店員やウェイター、ウェイトレスに対する丁寧度とでは、はっきりした区別が見られる。つまり、前者は「ウチ」、後者は「ソト」と認識されていると言える。アメリカ側を見るとその区別はない。

つまり、この結果から言えることは、日本グループの表現の丁寧度は、上下関係は確かに関係してはいるものの、「ウチ・ソト」の意識がはっきりした丁寧表現の差を生みだしているということである。ということは、学習者が日本の「ウチ・ソト」の概念が的確にとらえられるようになることが、適切に敬語を使うのに有益だと言えるのではないか。つまり、「ウチ・ソト」を基本としてそれぞれに「上下」の意識が絡み合っていると考える方が理解しやすいのではないか。しかも、この比較研究の結果から、日本ではアメリカより「ウチ・ソト」の境界がかなりはっきりしていると言える。つまり、「ウチ」に入るのは、自分自身、自分の親・兄弟、親しい友人、彼／彼女ということだ（図1、2参照）が、アメリカの場合は必ずしもそうではない。

図1 日本におけるウチ・ソト

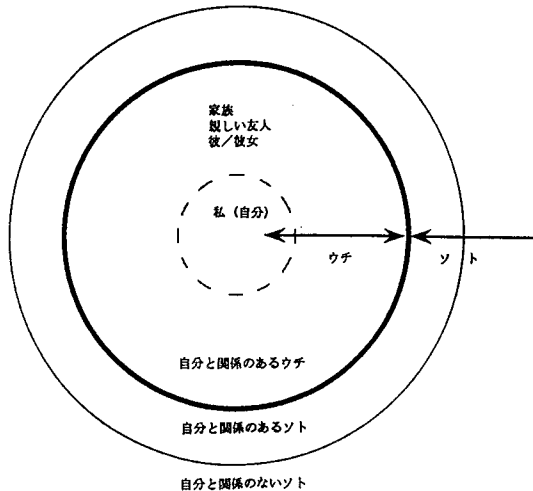
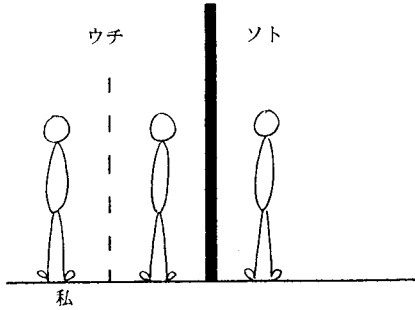


図2 日本におけるウチ・ソト



Hill et al. (1986)、井出、他(1986)の研究結果でもう一つ注目すべき点は、「見知らぬ中年の人」に対しては日本グループはかなり丁寧な表現を使う（丁寧度は教授に次いで高い）が、アメリカグループでは、教授、アルバイト先の上司、医者などより丁寧度が低いことである。日本の大学生を対象にした断わりの場面での待遇表現についての比較研究（Ito,1989）によると、日本の場合は「ウチ」か「ソト」の区別、「ソト」の人については「年令」が丁寧度の差に大きく関与している。一方、アメリカの場合は「社会的地位」が表現の丁寧度の差に大きく関与している。このことは、一つには「上下」の概念が日本で必ずしも一致しないこと、また、先の「見知らぬ中年の人」に対する丁寧度の違いを説明するものと言える。これも日本の場合、「ウチ・ソト」の原理を基本として、それに「上下」の原理が絡み合っていると考えると理解しやすい（図3、4参照）。

図3 「ウチ・ソト」の原理を基本として「上下」の原理が絡み合っている

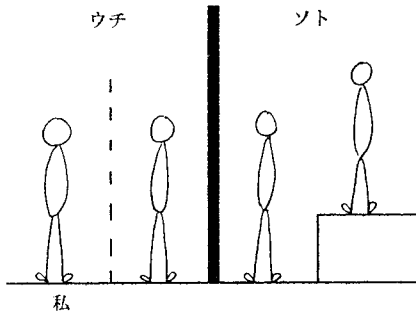


図4 話し手が、対象となる人との関係をどのように意識するか

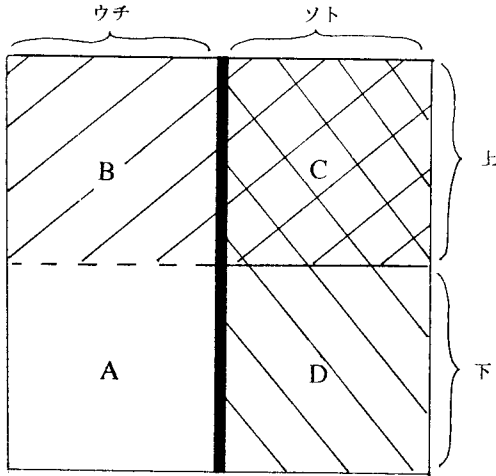


図4は、話し手が、対象となる人との関係をどのように意識するかを表したものである。牧野（1996）も指摘しているように、対象者との間に全く対人関係が存在しない時は敬語は使われず（例えば「ソト」で「上」である首相について話すとしても、首相のことは個人的に知らない為「首相は渡米なされた」というようなことは言わない）、その場合はこの図の範囲外である。ウチ・ソトの軸はグループ内外や親疎関係に関連しており、上・下の軸は年齢や社会的地位に関連している。「ソト」と「上」は心理的あるいは社会的な隔たりが大きく、「ウチ」と「下」は小さいという関係にある。ウチ（AB）は、上下関係についての配慮は問わず敬語を使用しないのが基本。ソト（CD）は、上下関係に関する配慮があり敬語使用が基本。BとDには、ウチとソトの要素が入り込んでおり、Bは、敬語を使用しないウチを基本として、時によっては使用する場合。Dは、敬語使用を基本として、時によって敬語を使用しない場合である。但し、この図は「ウチ」「ソト」を分けている縦の線を絶対的、固定的なコンクリートの壁のようにとらえることを示唆しているものではない。実際に日本社会では、例えば家族などのいわば一次的ウチ・ソト関係に加え、自分の大学対他大学、自分の会社対他の会社というような二次的ウチ・ソト関係も存在し、その境界は実際には話者の意識によって動的にとらえられるからである。しかしここでは学習者にまず基本的な概念をわかりやすく提示することが目的であることを断わっておきたい。

また第三に、この「ウチ・ソト」の概念は敬語に限らず日本語全般に関わる概念である。例えば、日本語学習の初期の「お名前は？」「スミスです。」などの会話にもあらわれている。第一日目には敬語の概念は説明されないが、学習者は「名前は？」ではなく「お名前は？」と言うことを習い、「スミス。」と言うと「です」を加えるように指導されるのは、この概念の実行と言えよう。このように日本語学習の過程で繰り返し出てくる概念を中心に指導すると、いきなり「全く新しい概念だ！」とショックを受けることもなく、先に述べた心理的・認知的負担を軽減することにもつながるであろう。

また、このアプローチをとると、「敬意・尊敬の念」や「上下関係」を前面に押し出すより、「いくら親しくなっても先生はやはり先生なんだ」（井出、他 [1986] の「わきまえ」、Hill et al. [1986] の

discernmentに共通)ということが、抵抗感も少なく、わかりやすいのではないだろうか。敬語は「敬」という字が示すように敬意を表すべき相手と話す時に使われる言語体系であるという説明が学習者にとってはわかりにくい概念ではないかと先に述べたが、尊敬語は尊敬に値する人に対して使う、などとすると初めにあげた「尊敬していない人に対してどうして敬語を使わなければならないのか」という疑問が出てくるし、上下の原理を強調すると、「ではどうして両親には敬語を使わなくていいのか」とか「私の先生は若いから、敬語を使わなくていいだろう」ということになってしまうかもしれない。もちろん上下関係は敬語に関わる概念であるし、常に「尊敬の念」を持って敬語を使って人に接するという人もいるだろうが、社会・文化的背景が違う学習者にわかりやすいアプローチという観点から敬語指導を考えると、このようにまず「ウチ・ソト」の概念を中心にした方が、理解しやすいのではないか。これに関連して、教科書で一般的に“honorific”とか“respectful”などという用語が使われているが、その用語を使う時には注意が必要かもしれない。例えば、日本人は普通「あの先生のこと全然、先生として尊敬していない」と思っても、その先生に面と向かって話す時やはり敬語を使うだろう。しかし用語の持つ意味とのずれのため、学生がその先生を「尊敬」していないから敬語を使わなくていいだろうという考えを持つのも仕方がない。“respectful”などの用語を使う時には、その意図するところを学習者に明らかにする必要があるだろう。

第四に、国立国語研究所が愛知県岡崎市で二十年の間において行った二つの調査(国立国語研究所、1957、1983。南[1987]より)を比べると、20～30才代の人達の間では、二十年後の調査の方が、ウチ・ソト関係が敬語使用を左右する傾向が強くなっているという結果が出た。また、大都市における敬語使用の実体調査(柴田、他、1980。南[1987]より)によると、アパート居住者の方が、一戸建ての住民より親しい友人など「ウチ」に属する人に対してはよりぞんざいな言葉遣いをし、「ソト」と判断する人にはより丁寧な言葉遣いをする傾向が見られた。日本の都市化を考えると、敬語使用を左右する条件としてウチ・ソト関係の比重が大きくなる傾向が今後も進むと言えるかもしれない。また敬語指導の対象である大学生が多く接する日本人を考えると、これらの研究結果から、「ウチ・ソト」の把握は意義があると思われる。

## 6. 結論

本稿では、大学生の学習者を対象に、学習者の心理的・認知的負担、文化的背景の相違のために起こる概念のずれを考慮した敬語指導について考察した。学習者の心理的負担を考慮する観点から、敬語を使う意図は日本語に特有な現象ではなく学習者の文化にも共通することを意識させたい。認知的負担の考慮の観点から、まず敬語を一章で一度に提示したりせず、できるだけ日本語学習の初期の段階から少しずつ提示するようにする。また、敬語使用を左右する概念が学習者になじみのあるものであると、敬語学習が新情報のみでないため学習の負担が少ない。その点を考え、様々な敬語研究の成果から、敬語使用の条件の中で「ウチ・ソト」の原理を中心に指導することが学習者の理解を助けるのに有効であると考え。この「ウチ・ソト」の概念は敬語に限らず日本語全般に関わるものであり、学習者は日本語を学ぶ中で随時触れてきている概念であるためである。さらに、敬語にまつわる他の条件、例えば「上下」の概念はどの文化にもあるため、学習者は自分の文化の尺度を用いて日本語における「上下」を理解しようとし、文化背景の相違のために起こる概念のずれから、逆に理解を妨げることにもなりかねない。そのことから「ウチ・ソト」の概念を中心に「上下」の意識が絡み合っているというアプローチをとることは有意義ではないかと考える。



## 謝辞

本稿は伊藤（1997）をもとに修正、加筆したものである。大会で貴重なご指摘をくださった方々に紙面を借りてお礼申しげたい。

## 注

1. 牧野（1978）は、日本社会における話者自身と話者をとりまく話者側の者を含めた「拡大エゴ」の存在、日本人の意識に見られる「私的空間」と「公的空間」の峻別という興味深い考察をしている。それはまさにこの「ウチ・ソト」の意識に共通する概念であるが、そこまで考えると実はこの「ウチ・ソト」の概念は日本「語」とどまらず、日本文化全般にまで関わる概念だということができる。

## 参考文献

- Brown, P., & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, R., & Gilman, A. (1960). The pronouns of power and solidarity. In T. Sebeok (Ed.), *Style in language* (pp. 253-276). Cambridge, MA: MIT Press.
- Hill, B., Ide, S., Ikuta, S., Kawasaki, A., & Ogino, T. (1986). Universals of linguistic politeness: Quantitative evidence from Japanese and American English. *Journal of Pragmatics*, 10, 347-371.
- Ide, S. (1982). Japanese sociolinguistics: Politeness and women's language. *Lingua*, 57, 357-385.
- Ito, Y. (1989). Strategies of disagreement: A comparison of Japanese and American usage. *Sophia Linguistica*, 27, 193-203.
- 井出祥子、萩野綱男、川崎晶子、生田少子(1986)『日本人とアメリカ人の敬語行動』南雲堂  
伊藤ゆり(1997年4月)「学習者の理解を助ける敬語指導をめざして」口頭発表、第9回カナダ日本語教育  
振興会1997年度年次大会、於トロント国際交流基金日本文化センター。
- 北原保雄(1988)「現代敬語のメカニズムはどうなっているか」『国文学—解釈と教材の研究』学燈社  
柴田武(1988)「日本人の敬語」『国文学—解釈と教材の研究』学燈社  
杉戸清樹(1983)「〈待遇表現〉---気配りの言語行動---」水谷修編『話しことばの表現』筑摩書房  
牧野成…(1978)『ことばと空間』東海大学出版会  
----- (1996)『ウチとソトの言語文化学---文法を文化で切る』アルク  
南不…男(1987)『敬語』岩波書店